



TITLE:

故佐波宣平教授自作年譜

AUTHOR(S):

経済学会

CITATION:

経済学会. 故佐波宣平教授自作年譜. 経済論叢 1968, 101(5): 512-516

ISSUE DATE:

1968-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/133264>

RIGHT:

經濟論叢

第101卷 第5号

哀 辞

故佐波宣平教授遺影および原稿

ミュール型紡績工場	堀 江 英 一	1
部門間の連関構造	山 田 浩 之 井 原 健 雄	23
原価管理思考としての変動予算概念	野 村 秀 和	43
低開発国開発計画における技術選択	名 畑 恒	64

記 事

佐波教授逝く

追悼講演（山田浩之 前田義信 谷山新良 森嶋通夫 上田三四二）

追 憶 談（葛城照三 安間進）

故佐波宣平教授自作年譜

昭和43年5月

京 都 大 学 經 済 学 会

故 佐波宣平 教授 自作年譜

明治 38 年 1 月 16 日 山口県都濃郡末武北村字花岡に出生。姓は「岩瀬」。

大正 6 年 3 月 花岡小学校尋常科を卒業。

大正 8 年 3 月 同校高等科（2 年）を卒業。

幼少年期の教養：祖父が俳句の宗匠、父もまた、俳句をたしなみ、家に俳書十数冊（徳川期の木版）があり、これらをいつの間にかひとりで読むことをおぼえ、俳句に親しむ。その他、般若心経、浄瑠璃、百人一首を暗誦した。小学校 6 年のころから『日本少年』に投稿、ほとんど毎度、俳句その他の作品が掲載された。

大正 8 年 3 月～10 年 3 月 徳山海軍煉炭所に製図職工見習として勤務。

大正 10 年 4 月 山口県立下松工業学校（機械科）の創立第 1 期生として入学、教頭の楠田鎮雄先生（文学士）から著しい学問的感化を受け、学問へ開眼させられる（文士を志すべしと、しきりにいわれた。）

大正 12 年 3 月 同校第 2 学年修了後、中途退学。

大正 12 年 4 月 私立鴻城中学校（山口県山口町に所在）の第 4 学年に編入学。

数学、物理、化学、製図を得意とする。月刊誌『受験と学生』に投書、そのほとんど毎号にコント風の短編が掲載された。

大正 13 年 3 月 同校第 4 学年修了。

大正 13 年 4 月 山口高等学校（文科甲類）へ入学。

大正 13 年 5 月 佐波へ入家。

高校時代、白陵会（キリスト教青年会）に入会、キリスト教会に通う。新約聖書から大きな作用を受ける。また吉木信、藤井とともに同人文芸雑誌『山峽』を発行。

昭和 2 年 3 月 山口高等学校を卒業。

昭和 2 年 4 月 京都帝国大学経済学部へ入学。

昭和 3 年 7 月 （2 回生のときの夏休み）から『明治・大正大阪市史』編集に参加、交通・海運部門を受け持ち、大阪商船株式会社創立事情などを研究。2 回生のとき、小倉金之助『統計的方法』によって啓発を受く。また大学生 3 年間をとおしてフランス語の勉強に熱中した。

昭和 5 年 3 月 京都帝国大学経済学部学士試験に合格。

世界経済恐慌さなかの卒業にて就職難は言語に絶す。在学中の研究テーマに関係のある大阪商船株式会社に就職試験を受け、落ちる。ただし、楠田鎮雄先生の推薦に

よって福岡県立筑紫高等女学校の英語教諭として内定した。しかし、小島昌太郎教授に相談のうえ、これをこたわって、大学院にすすむことに決める。

昭和5年4月 京都帝国大学（経済学部）大学院に入学、小島昌太郎教授の指導を受ける。

昭和5年9月 京都帝国大学副手となる（大学院生のまま）。

昭和6年1月～7年9月 小島教授研究室に設立された京都経営学会の発行する月刊誌『経営と経済』の編集に従事。同門の大学院学生数名とワーゲマン(Wagemann, E.)によるドイツ語の経済書3点『世界経済機構と景気変動』昭和7年、『国民経済組織の欠陥と世界恐慌』昭和7年、『景気変動論』昭和8年、を翻訳、出版。

昭和6年9月 立命館大学商学部へ非常勤講師として出講。

最初に受け持った講義は交通論であったと記憶する。以来、大東亜戦争の苛烈をきわめるまで、11年間、非常勤講師として勤務。受け持った講義科目は、交通論、海運論、保険論、火災保険論、貿易実践など。

昭和8年10月 訳書『シュターペルフェルド 海運運賃市場』を雄風館書房から出版。

この後半に、佐波の論文「我が国不定期貨物船の配船噸数に現われたる季節変動」、訳文キーズ「日本不定期船業の組織とその優越的地位」を収録。

昭和9年3月 京都帝国大学経済学部専任講師に就任。

昭和10年3月 高崎八重子（山口県出身）と結婚。

大学院入学以来、4～5年間、経済研究に自信をもちえず、大学院と経済学とから訣別せんと大いに煩悶をつづけたが、講師就任と結婚という二つの事件によって、とにかく、世間的に落ちつくことになる。

講師就任前後より数学の勉強を始める。歴史と数学とに研究の拠りどころを見つけたような気がしてきた。

昭和12年1月 長男、啓一出生。

昭和13年3月 京都帝国大学助教授（経済学部）に就任。外国経済書講読の講義を担当。このころから、Landrés, C. L.: *Mathematisch-Technische Kapitel zur Lebensversicherung*, 1921, を読み始める。絶大な影響を受ける。

昭和14年4月 保険論の講義を担当。

専任講師就任のころより、研究傾向が海運から保険に転じている。これが何によるものか、われながら、はっきりしない。思うに、当時ドイツ語に非常な興味をおぼえていたが、ドイツ語で書かれた権威ある文献は海運関係にはほとんどなく、保険関係にはいくつもこれのみいだせたということ、および、保険研究には数学が

重要な役割をもっているということ、にあるらしい。

昭和14年7月 著書『再保険の発展』を有斐閣から出版。

昭和15年2月～3月 満州国および中華民国へ出張。

昭和15年6月 辰馬海事記念財団が創立され、その評議員となる。以来、この財団および、同理事松本一郎氏との交友がつづく。

昭和16年12月 大東亜戦争に突入して以来、大学の講義体制が全国的に重点的となり、保険論は議義科目からはずされ、交通論、なかんずく海運論が採り上げられる。それに伴い、研究テーマが保険から海運に転じる。

昭和17年4月 長女、基子出生。

大東亜戦争にはいったころから数理経済学の勉強を開始。渡辺孫一郎『数学ノ経済学へノ応用』（岩波「数学講座」）、日比野勇夫『経済への数学解析』（同文館）、Marshall, A.: *Principles of Economics*, 8. ed. から教示を受ける。

昭和18年9月 訳書『P. M. ジュース アメリカ海運政策』を有斐閣から出版、巻末に佐波の論文「戦時アメリカ海運政策」を収録。

昭和18年9月 訳書『合衆国海事委員会 アメリカ海運の経済的調査』を辰馬海事記念財団から出版。

昭和19年4月 交通論の講義を担任。

昭和19年6月 訳書『ベルリン景気研究所 海運における競争』を辰馬海事記念財団から出版。

終戦に近き2～3年間は、しばしば、勤労動員学生付添教官として各地の工場に向向。こうした場合、学生数名に、ひそかに、数学を教え、付添教官をやめて帰宅後もその通信教授をつづける。テキストとしては、馬杉肇『微分積分学の初歩』を使用した。

昭和19年8月 臨時召集（呉海兵団）を受けるが、2日後に帰宅。

昭和20年1月 次男、悠紀出生。

昭和21年5月 著書『海運政策外国文献一解題と批判』を海事文化研究所（辰馬海事記念財団）から出版。

昭和21年7月 海運政策特別委員会（運輸省）に参加、日本海運の再建策をねる（約3ヵ月間）。

昭和21年7月 京都帝国大学教授に就任。経済第5講座を担任。

昭和22年2月 次女、敦子出生。

昭和23年2月 著書『交通概論』を有斐閣から出版。

昭和24年1月 著書『海運理論体系』を有斐閣から出版。

昭和24年2月～26年2月 京都大学評議員。

昭和24年9月 著書『交通学大要』を大阪鉄道図書株式会社から出版。

昭和25年4月～32年6月 兵庫県立神戸商科大学教授を兼任。

昭和25年9月～39年6月 学術奨励審議会(学術用語分科審議会)専門委員に任命される。

昭和25年11月 日本保険学会理事に就任。

昭和25年11月 京都大学より経済学博士(経第35号)の学位を受ける。

昭和26年7月 著書『保険学講案』を有斐閣から出版。

昭和26年7月 海事文化研究所(神戸)で開催された海事法学会に出席。その席上、心筋梗塞の発生を生じ、倒れる。以来、5年間たびたび激しい心臓発作を生じ、研究活動を著しく制限せられる。

昭和26年12月 随筆集『海運研究者の悲哀』を出版。

昭和28年4月 新制大学大学院の発足とともに、京都大学大学院経済学研究科学生への指導にあたる。

昭和28年11月 運輸省第1回交通文化賞を受く。受賞理由:『海運理論体系』『交通概論』の著作、『アメリカ海運政策』『アメリカ海運の経済的調査』『海運に於ける競争』の翻訳。

昭和29年11月 著書『改版 交通概論』を有斐閣から出版。

昭和30年4月 「海事用語」を『海事研究』(年4回、日本海事振興会)に連載開始。同誌廃刊後は『海事用語根源』と題して、昭和39年1月から『海運』(月刊、日本海運集会所)に連載、現在にいたる。

昭和30年6月 随筆集『保険危言』を出版。

昭和33年4月 健康かなり回復し、心臓発作も起こらなくなり、ゼミナールも本格的にやれるようになった。ゼミナールで、Allen, R. G. D.: *Mathematical Economics*, 1957, を使用する。この前後より、線型計画法その他の新しい手法の経済学の研究に従事する。

昭和34年11月 日本交通学会理事に就任。

昭和35年10月 随筆集『海だ海だ』を出版。

昭和36年3月～6月 経済論叢に「C. I. F. 価格の巨視分析 (一)(二)」を発表。これは通産省昭和26年、および昭和30年産業連関表における「損害保険業の生産額」の定義、ならびに計算方法が不当であることを指摘した論文であって、同年10月

香川大学で開催された日本保険学会においても「財産保険基本方程式」と題する研究報告によって、上記の不当を指摘する。この指摘は当局の認められるところとなり、昭和35年産業連関表では佐波の主張したとおりの定義、計算方法が採用される。すこぶる欣快。

昭和36年10月 香川大学で開催された日本保険学会に研究報告のため出席し、胃潰瘍の吐血、下血を発生。

昭和37年1月 著書『海運動学入門』を海文堂から出版。

昭和38年2月 著書『交通学入門』を交友社から出版。

昭和38年7月 北海道大学経済学部へ非常勤講師として出講（保険論）。

昭和38年11月～12月 日本専売公社京都病院にて、網膜剥離の手術を受ける。

昭和40年2月 養母ナエワ死去。

昭和40年4月～10月 山口大学経済学部へ非常勤講師として数回出講（保険論）。

昭和40年8月 京都大学病院にて胃癌手術を受ける。そのあと1カ月して下半身にしびれを感じ、日々これが増悪、スモン（非特異性脳脊髄症）という奇病と診断される。

昭和41年4月 数理経済学の講義を担当（昭和41年度および42年度）。

昭和41年6月 著書『弾力性経済学』を有斐閣から出版。

昭和41年8月、9月 京都大学病院にて肝臓癌手術を受ける。

昭和41年10月 日本海運経済学会の創立とともに、副会長に就任。

昭和42年7月 京都大学病院にて肝臓癌手術を受ける。

昭和42年12月6日 「産業連関表における保険業の生産額」の題目で経済学部教授退官記念講義を行なう。

* 昭和43年1月8日 京都大学病院（外科南病舎）に入院。

* 昭和43年2月19日 昏睡状態におち入る。以後10日間、昏睡と意識回復を繰返す。

* 昭和43年2月29日 肝臓癌のため逝去。

* 昭和43年3月12日 京都大学経済学部において、京都大学経済学会葬が行なわれる。

* 昭和43年3月 編書『現代日本の交通経済』を東洋経済新報社から出版。

（注 * は山田浩之が追記）